

## 図書室カレンダー

11月

○ 閉室日  
 13:00~14:00

【通常開室時間】  
 昼: 12:45~13:10  
 放: 15:40~17:00  
 ※図書室が開室していても、開室できる場合があります。担当者に声をかけてください。

月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

## 12月開室予告

月	火	水	木	金	土	日
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

- 4日~10日 期末考査
- 11日~23日 午前中授業
- 23日 映画観賞会(図書室)
- 24日 終業式

## 読書感想文入選おめでとう!

■ 作品名『おもてなしの心』  
 2年6組  
 内海 舞香 さん



書名:  
 「ディズニーおもてなしの神様が教えてくれたもの」鎌田洋

※裏面に感想文全文を掲載しています。

## 『君たちはどう生きるか』吉野源三郎

貧困・いじめなどあらゆる社会問題を、主人公の中学生「コペル君」が直面する体験や悩みを通じて描かれています。コペル君のように自分の弱さを初めて実感するのが10代。その弱さを認め、自分なりの生き方を探索する大切さを学びました。

紹介者 3-6 猪澤 ひかる



漫画版「君たちはどう生きるか」も読みやすくオススメです(図書だより7月号掲載)

【所蔵番号: 154-3】



## 『初版 グリム童話集』吉原 高志

そういえば、グリム童話をしっかり読んでいたことが無いと思いに取った。初版ということで子供向けではない話も多く、話も割とあっさりしている。

童話とは教訓が含まれているものと思いがちだが、そうではない話も多く載っていた。登場人物も様々で、人や動植物だけでなくソーセージやシャベルなども登場する。ツッコミどころのある話ばかりで、カエルの王子は自分をなげた姫と結婚してよかったのだろうか。気になった人は読んでみてほしい。

紹介者 3-2 浄徳 十羽

## 君たちはどう生きるか

吉野源三郎著

著者がコペル君の精神的成長に託して語り伝えようとしたものは何か。それは、人生いかに生きべきかと問うとき、常にその問いが社会科学者的認識とは何かという問題と切り離すことなく問われねばならぬ、というメッセージであった。著者の没後遺稿の意をこめて書かれた『君たちはどう生きるか』をめぐる回想(丸山真男)を付載。

青 158-1  
 岩波文庫

## 『おもてなしの心』二年六組 内海舞香

この本に出会ったときの、引き寄せられるような感覚は今でも忘れられません。

私は、読む本を選ぶときにはいつも、本の帯に書かれた言葉を参考にします。この本には「サービスを超えたおもてなし」と書かれています。それを見たとき、「サービス」と「おもてなし」の違いって何だろうとふと考えました。

「おもてなし」と聞いて私が一番に思い浮かぶのは、東京オリンピックの誘致に向けたプレゼンテーションで滝川クリステルさんが日本人の心として紹介した場面です。あとき「おもてなし」という言葉が流行語にもなりましたが、日本人の「サービス心」とは違う「おもてなしの心」のすばらしさを私に教えてくれたのがこの本でした。

舞台はディズニールランド。「夢の国」で働くキャストが「本当のおもてなし」に気付き学び、実践できるまでに成長していく姿が記されています。

二年前、中学の修学旅行でディズニールランドへ行き、キャストの方々の優しさを感じた思い出のある私は、完璧にも見えた皆さんがどんな風に成長されていたのか、その過程を知らされる気がして、わくわくしました。

本で紹介されたエピソードにはどれも、キャストの皆さんの根底にある、来園したゲストに対して、「心から楽しんでもらいたい」という思いがあらわれています。例えば、キャストがメモ帳にドナルドの絵を描き、「楽しんでね。」とメッセージを添え、男の子に渡すという話がありました。男の子は耳が不自由で、それを察したキャストは、声として届けられない思いを何とか伝えたくて、メッセージとして届けたのです。見返りを求めない心配りを感じました。

また、私が修学旅行中に感じた優しさというのは、お土産を買ったために大きなお店に入った時のことです。店に入ったらまず、「いらっしゃいませ。」と聞かせるのが普通ですがそうではなく、「こんにちは」と声をかけてくれたり、会計後には「行ってらっしゃい！」と伝えてくれたりしました。それらの言葉を聞いて、本当に夢の国にいるような、自分が主人公になったような感覚になりました。そんな声掛けについて私は、ゲストに次の向かう足取りが軽くなるようにやってきているのではないかと考えました。ゲストに心から楽しんでもらうという想いのこもった「おもてなし」を感じました。

普段の生活でも、優しい心配りを感じたことがあります。例えば部活中、扇風機を使って暑さをしのいでいたのですが、片付けるのをいつい忘れてしまうことがあり、次の日、片付けようと置きっぱなしにしていたところを見ると、そこには何もなくて、誰かが片付けてくれました。それが誰なのかわかりませんが、その人はお礼を言われずとも笑顔で過ごしているのでしょう。私は私がそんな心配りができる人だと自信をもって言えません。私は気づかれている心配りで止まってしまっていると思います。

「サービス」と「おもてなし」の違いも、本を読み進めるうちにわかってきました。私は、「おもてなし」を英語で「サービス」といって、違うなとて考えていました。しかし、じつはそれは違うようです。まず、「サービス」とは相手に気付いてももらうことを前提とした心配りで、私の経験でいう気付かわれている心配りという意味です。そして、「おもてなし」とは、一つの説として「表なし」とも書くそうです。表も裏もなく見返りを求めない心配りということです。他人が気付かないところで、他人のために行動することが「おもてなし」で、本当の優しさを持っている人ができることだと思います。だから、「サービス」で止まってしまっている私も「おもてなし」の心を持った人になりたいです。

私は生徒会執行部に所属したことがあり、みんなに見られていないところでも活動することがありました。みんなに知られていないところでもたくさん頑張っているのに気づかれないから、「なぜ自分達はか…」。「と思うこともありました。でも、この本を読んだことで、みんなに気付いてもらえるところばかりでしたら、行事を成功させるために先生に協力する、ただのサービス業者になってしまったりだったと気付きました。私は生徒会の一員として何ができるか考えました。思いつくものはどれも気づかれることはなさそうですが、「おもてなしの心」つまり、見返りを求めない行動をすることが本当の優しさであると思うので、それを胸にこれからの生活を送っていきます。

他人が喜んでいることが自分の幸せと思える人が一人でも増えれば、良い循環が生まれ、誰も「おもてなしの心」を持つことができ、やさしい世界が作られていくと思います。わたしは、そんな人になります。